

## 研究主題

### 「児童が自らすすんで読み、『分かった、できた』と感じられる学習指導の実現

#### － 小学校低学年国語科、説明的な文章におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導を通して －

東京都教職員研修センター研修部教育経営課  
練馬区立田柄第二小学校 主任教諭 上原 妙子

## 第1 研究のねらい

令和4年12月文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童の割合が小学校全体では10.4%であった。また、令和5年2月文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」によると、入学直後から学習や生活になじめない子供がいると示されている。これらの実態の背景には、「遊び」中心のカリキュラムである幼児教育と、「教科」中心のカリキュラムである小学校教育との違いが影響していると考えられる。

さらに、同委員会は、子供の発達段階を見通した架け橋期（5歳児から小学校第1学年までの2年間）の教育の充実を示している。このことから、架け橋期の教育では、小学校教員が幼稚園から小学校への接続を意識しながら子供の学びを連続したものとして捉えること、子供の成長を長期的な視点で捉え、児童理解に努め、適切な指導を行うことが重要であると考えられる。

そこで、幼稚園教員が取り組んでいる指導やユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習指導を小学校教員が行うことで、特別な教育的支援を必要とする児童を含めた全ての児童が「分かった、できた」と感じられる授業につながると考えた。

## 第2 研究仮説

小学校低学年国語科の説明的な文章において、幼稚園教員が取り組んでいる指導やユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習指導を実施することで、架け橋期の教育が充実し、全ての児童が自らすすんで読み、「分かった、できた」と感じることができるだろう。

## 第3 研究の内容と方法

### 1 基礎研究

- (1) 幼稚園教育要領解説（平成30年2月）、小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説総則編から、幼児教育と小学校教育との接続について調べた。
- (2) 授業のユニバーサルデザインについて、先行研究を比較検討し、まとめた。

### 2 調査研究

#### (1) 調査の概要

担任をもつ都内の公立幼稚園20園の幼稚園教員36人、都内公立小学校8校の小学校教員63人に対して、アンケート調査を実施した。

ア 幼児教育と小学校教育との円滑な接続について（幼稚園、小学校）

イ 「言葉による伝え合い」における指導方法の工夫、配慮や援助について（幼稚園）

## ウ 国語の授業で取り組んでいる指導の工夫について（小学校）

### (2) 調査結果

ア 幼児教育と小学校教育の円滑な接続に関して、「難しさを感じている」、「どちらかといえど難しさを感じている」と回答した割合は、幼稚園教員、小学校教員ともに95%以上であった。また、保育及び授業参観の経験に関して、幼稚園教員による小学校第1学年の授業参観の経験がある教員が83%に対して、小学校教員による幼稚園年長児の保育参観の経験がある教員は37%と、低い結果であった。

イ 幼稚園教員は、読み聞かせをするときに読み方を工夫したり、幼児が知らない言葉が出てきたときに知らせたり、幼児が感じた思いを大切にしたりしていた。また、幼児が他者と言葉でやり取りをする際、教師が言葉を補う、代弁する、適切な言葉を伝える、子供の思いを橋渡しするなどの配慮や援助をしていた。

ウ 小学校教員は、国語の授業において、学習の見通しをもたせたり、発問や板書を工夫すること、ペアやグループ、学級全体で考えを共有すること、興味を引く教材提示の仕方をするなどについて、取組状況の割合が高かった。

### 3 開発研究

基礎研究及び調査研究から、幼稚園教員が取り組んでいる「言葉による伝え合い」における指導方法の工夫、配慮や援助の方法及び多くの小学校教員が取り組んでいたユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫について、六つの手だてに整理し（表1）、授業の導入から展開、まとめの過程まで様々な場面で取り入れることとした（「言葉による伝え合い」の指導方法の視点を「幼」、ユニバーサルデザインの視点を「UD」とした。）。

表1 ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導における六つの手だて

六つの手だて	説明	具体例
「幼」 言葉の付け加えや言い換え	児童が難しい言葉を理解できるように、言葉を補助的に付け加えたり言い換えたりすること。	・言葉の付け加え ・他の言葉への言い換え
「UD」 視覚化	児童が学習内容を理解できるように、視覚的な支援となるものを効果的に活用すること。	・写真の提示 ・サイドライン
「UD」 焦点化	児童が学習の見通しをもてるように、ねらいを絞ったり、活動を分かりやすくシンプルにしたりすること。	・今日の学習活動の提示 ・分かりやすい発問
「UD」 動きのある活動	児童が学習内容を理解できるように、身体の一部を使った学習活動を行うこと。	・動作化 ・音読
「UD」 教材提示の工夫	児童が興味を引くように、教材の見せ方を工夫すること。	・教材文の並び替え ・誤文の提示
「UD」 共有化	児童が思考を深められるように、自分の考えを他者と伝え合うこと。	・ペアでの伝え合い ・全体での伝え合い

### 4 検証授業（令和5年10月～11月実施）

都内公立小学校にて、第1学年「せつめいする文しょうをよもう（教材名：じどう車くらべ）」（全7時間扱い）の授業を実施し、整理した六つの手だての有効性を検証した。

(1) 児童が「分かった」と感じられたかについて（文章を並び替える課題「並び替えパズル」の結果による分析）

児童が「分かった」かどうかを検証するために、本単元の目標「事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる。」を踏まえ、各自動車の「しごと」に対応した「つくり」となるように、文章を正しい順序に並び替える課題（「並び替えパズル」）を第1時と第6時に実施した。

全問正解だった児童は、第1時では0人（25人中）だったのに対して第6時では15人（24人中）に増加した。第6時では、7人（24人中）が「しごと」と「つくり」の関係は捉えていたが、順序の誤りがあった。「しごと」と「つくり」の関係が一部捉えられない部分があった児童は、第1時では9人（25人中）だったが第6時では2人（24人中）に減少した。

多くの児童にとって「分かった」ことにつながる結果となったが、全ての児童が「分かった」と感じられたかについては課題が残った。

(2) 児童が「分かった」と感じられたかについて（「意識調査」による分析）

単元終了後、六つの手だてを取り入れたことにより「分かった」と感じたかどうかについて意識調査を行った（図1）。

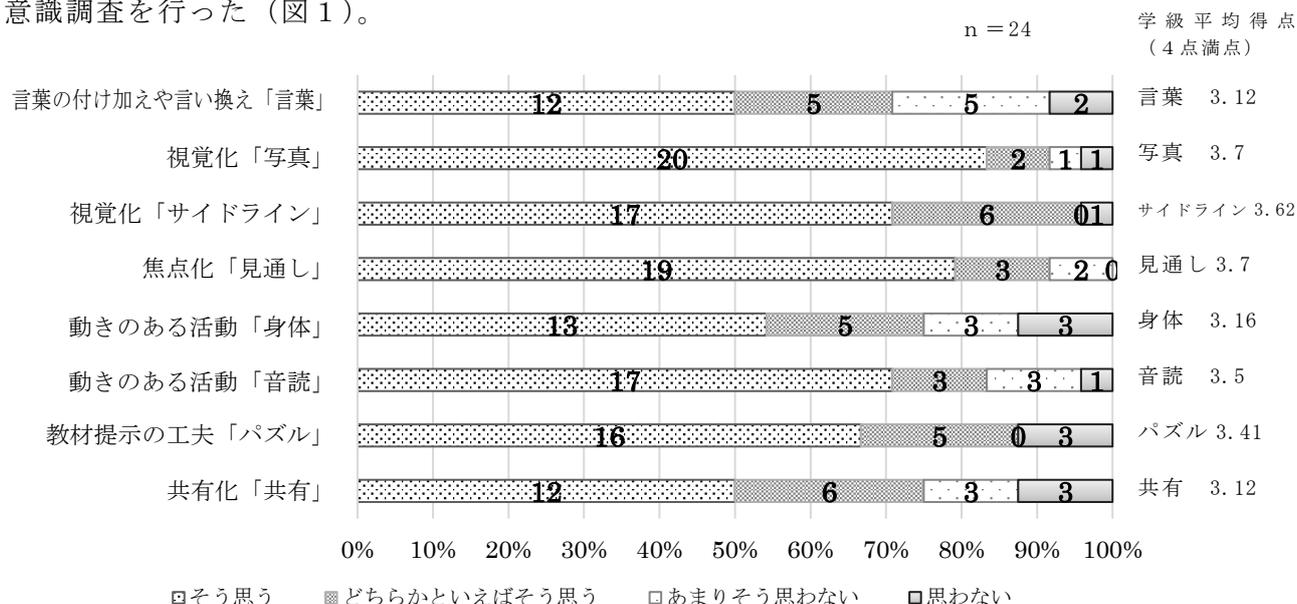


図1 「分かった」と感じたかについての回答結果（六つの手だて別 4件法）

学級平均で見ると、どの手だても4点満点中3点以上であり、肯定的回答をしていた。特に視覚化、焦点化、動きのある活動のうち音読については3.5点以上であり、児童はこれらの手だてに有効性を感じていた。これらの手だては、ほぼすべての時間で取り入れ、繰り返し児童が取り組んだため、「分かった」につながったのではないかと考える。しかしながら、個別に見てみると、有効な手だてだとは感じなかった児童も見られた。

例えば、言葉の付け加えや言い換えについては、自分の考えを明確にもっている児童にとっては、「分かった」とは感じられていない場合があった。重要な言葉は指導事項として教師が教え、児童の言葉の感覚を豊かにしていくことが大切であると考え。

また、共有化については、ほぼ全ての時間で取り入れたが、考えを伝えることが得意でなかったり自分の思いが強かったりする児童に否定的回答が見られた。共有化のよさを感じ、様々な相手との共有ができるように、環境設定していく必要があると考える。

また、動きのある活動（身体）については、全ての時間ではなく、児童が必要だと感じた学習活動のときに取り入れたが、「分かった」に結び付いていない児童も見られた。動きのある活動が児童にとって真に必要と感じ、様々な単元で繰り返し取り入れることで、「分かった」と実感できるようにしていくことが大切であると考え。

### (3) 児童が「できた」と感じられたかについて（「意識調査」による分析）

毎時間の終了時、「書かれている内容を考えながら読むことができた」かについて振り返ることにより、「できた」と感じたかどうかについて意識調査を行った（図2）。

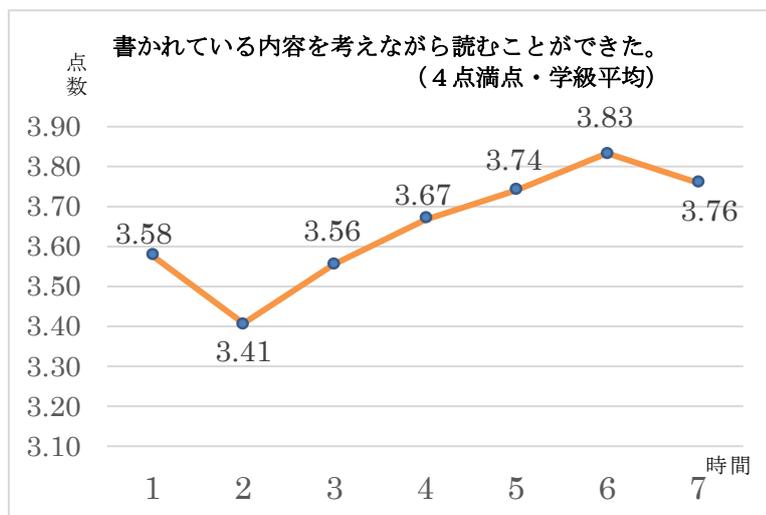


図2 「できた」と感じたかについての回答結果  
(時間別 4件法 学級平均)

に慣れてくると、第4時以降は評価が上昇した。本児童は、学習内容を自分のペースでゆっくり理解する傾向があり、学び方を理解するのに時間がかかったが、六つの手だてを繰り返すことにより学び方を理解すると、「できた」と感じられるようになった。

## 第4 研究の成果

幼稚園教員が取り組んでいる「言葉による伝え合い」における指導やユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習指導を実施することにより、多くの児童が学び方を理解し、自らすすんで読むことにつながった。また、視覚的な支援や活動の流れの提示は、児童の「分かった」と感じることにつながること、本研究で取り入れた六つの手だてを繰り返すことにより、児童が「できた」と感じることにつながることが分かった。

## 第5 今後の課題

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導を国語科「読むこと」以外の領域、他教科でも行い、どの児童にも分かる授業づくりにつなげる。また、架け橋期にあたる第1学年のみならず、他の学年の指導にも本研究を活用し、児童の学習のつまずきを減らす。

学級平均で見ると、肯定的な回答をしていた児童が多く、学び方を理解してからは数値が上がった。第2時に肯定的な回答が下がったのは、写真の提示などの視覚的な手だてが少なかったこと、文章の大まかな構造を理解する学習が主だったことが考えられる。

また、個別で見ると、時間によって否定的な回答をしている児童が見られた。例えば、ある児童は、第1時に2点、第2時、第3時に1点だったが、その後学習の仕方